



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	(研究ノート) 中華学校における音楽教育：横浜山手中 華学校と横浜中華学院を事例として(fulltext)
Author(s)	有澤,知乃
Citation	東京学芸大学紀要. 人文社会科学系. II, 66: 205-215
Issue Date	2015-01-30
URL	http://hdl.handle.net/2309/137691
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

(研究ノート)
中華学校における音楽教育
—横浜山手中華学校と横浜中華学院を事例として—

有澤 知乃*

留学生センター

(2014年8月29日受理)

要 旨

「民族教育」で知られる中華学校では、児童・生徒の、中国人または中華民族としてのアイデンティティの育成と維持を目的として、中国の言語や文化の教育を行っている。本稿では、音楽の授業に焦点を当て、学校の方針との関わりの中で、どのような音楽教育が行われているかを検証した。試験的研究として、「(中国)大陸系」として知られる横浜山手中華学校と、「台湾系」の横浜中華学院の二校の調査を行い、主に小学生の授業を対象に、教科書や教材、指導方法について調べた。その結果、横浜山手中華学校では、老華僑の間で歌い継がれてきた古い中国の歌曲等を取り入れた独自の教科書と、日本の公立学校で使用される教科書の二冊を併用しており、同校出身の教員が、中国語と日本語の両方を教授言語として授業を行っていることがわかった。一方の横浜中華学院では、台湾出身の教員が中国語を主な教授言語として授業を行っており、台湾から取り寄せた教科書を使用し、日本の教科書は補足的な扱いとなっている。両校の音楽担当教員からの聞き取り内容も含めて考察すると、前者では、日本社会に住む華僑として必要な知識や感性を育むことを目的としているのに対して、後者は、より台湾で行われている教育に近いものを子どもたちに提供することで、台湾社会の理解促進や台湾の人々との文化の共有を目指しているのではないかといえる。

1. はじめに

中華学校では、「民族教育」がその教育の柱となっていると考えられてきた。中国の歴史・文化・思想の教育を通して、中華民族としての誇りやアイデンティティを育成している学校、というのが中華学校に対する一般的なイメージではなかっただろうか。しかし、近年は、改革開放後の1980年代以降に来日した「新華僑」子弟の増加や、中国語習得などを目的とした日本人児童・生徒など、多様な子どもたちが中華学校で学んでいることが指摘されており(杉村2011 [b]), 陳2009), また、そこで伝達されようとする「エスニック・アイデンティティ」も、一様でないことが明らかになってきている(石川2010)。日本で生まれ育った「老華僑」の3世、4世たちと、中国・台湾で生まれいずれは母国に帰っていくことを想定している新華僑、そして両親ともに中国にルーツを持たない純粋日本人の子どもたちがともに学ぶ教室で、中華学校では、その「民族教育」によってどのような人材を育成しようとしているのだろうか。

中華学校の教育に関しては、これまで、民族教育の柱と考えられてきた言語や、歴史や地理等の教育方針やカリキュラムに関する研究が多く行われている。例えば、母国の言語として教育されてきた中国語が、中華学校の国際学校化に伴い、「外国語」または「資産」としての中国語という意味合いが持たれるようになっていくことや(上手2009, 杉村2011 [a]), 教育の根幹である民族教育とバイリンガル教育導入の間で生じるジレンマ(馬場2014)などである。本稿は、民族アイデンティティの自覚や表現に大きな役割を果たす「音楽」

* 東京学芸大学(184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

に着目し、中華学校における音楽教育の目的や役割を考察する。具体的には、どのような歌や器楽曲が教えられているのかを検証し、そして、それらの教材が実際の授業の中で、どのような意味合いをもって子どもたちに伝達されているのかを考察する。

試験的研究として、まずは、横浜の「横浜山手中華学校」と「横浜中華学院」の調査を行った。日本の中華学校の中でも、この二校は特に中国獅子舞や龍舞、民族舞踊などのクラブ活動が盛んで、中華街の様々な行事で児童・生徒や卒業生たちが演技を披露している。その点では、特に「民族教育」に力を入れている学校ともいえる。では、音楽の授業においても、中国の民族楽器や伝統音楽などが多く取り上げられているのだろうか。また、二校は過去に、いわゆる「大陸系」と「台湾系」に分裂した歴史があり、それぞれ中華人民共和国と中華民国(台湾政府)を支持する教職員と保護者が母体になって形成されている学校である。戦前の中華学校は、そのカリキュラムや教科書の内容、そして教員の資格などに関して、中華民国政府からの管轄を受けていた。1949年の中華人民共和国成立後は、しばらくの間は中国政府が大陸系華僑学校の管轄を行っていたが、1955年に華僑が自主的に国籍を選択できるという原則が確立されたのを機に、華僑学校も中国の教育部の管轄から離れることとなり、その後は華僑事務弁公室との「協力関係」を保ちつつも、大陸系中華学校は独自の教育方針や教育システムで学校運営を行うようになっている(張 2008: 56-57)。ⁱ しかし、横浜の(大陸系)中華学校は、神戸の中華学校に比べて中国政府とのつながりが強く、「積極的にその政策を受け入れている」(王 2009: 131)という先行研究もある。音楽教育に関してはどうか。中国大陸、台湾とのかかわり方が、二校の音楽教育の内容にどのような影響を与えているかについても検証したい。本稿では、2014年5月から8月にかけて行った調査を元に、使用されている教科書、見学した音楽の授業の様子、そして音楽担当教員及び関係者からの聞き取り内容を中心に考察を行う。

2. 横浜山手中華学校と横浜中華学院

現在日本の中華学校は、東京・大阪・神戸に各一校と横浜に二校あり、合計五校存在する。1949年に中華人民共和国が成立すると、横浜の華僑社会ではイデオロギー対立が起り、1952年には中華学校にも波及して「学校事件」が発生し、もともとあった「横浜中華学校」が、今日の、「横浜山手中華学校」(大陸系)と「横浜中華学院」(台湾系)に分裂して現在に至っている(譚 2008: 135-144, 張 2004: 50-52)。他の都市では学校分裂という形には発展しなかったが、今日、東京と大阪は台湾系、神戸は大陸系として、中国もしくは台湾とのつながりが大なり小なり維持されている。

横浜山手中華学校には、幼稚園、小学校、中学校がある。小・中学校の児童・生徒数は541名(2014年8月現在)で、国籍の内訳は、華僑160名(30%)、華人(主に日本籍)357名(66%)、日本人24名(4%)である。また、専任教員数は39名であり、その内訳は、同校の卒業生(華僑もしくは華人)が11名(28%)、中国出身者15名(38%)、日本人12名(31%)、イギリス人1名(3%)となっており、卒業生が多く教員として同校に戻ってきていることがわかる。ⁱⁱ

一方の横浜中華学院では、現在、幼稚園、小学校、中学校、高校が運営されている。小・中学校・高校における児童・生徒数は362名(2014年8月現在)で、国籍別にみると華僑42名(12%)、華人(主に日本国籍)153名(42%)、日本人167名(46%)、である。また、専任教員数は18名で、同校の卒業生が1名(6%)、台湾出身者16名(88%)、日本人1名(6%)でありⁱⁱⁱ、台湾から教員を積極的に採用している。^{iv}

3. 音楽の教科書

3.1. 横浜山手中華学校

大陸系の横浜山手中華学校では、各教科により、中国語の教科書を用いたり、日本語の教科書を用いたりしている。音楽の授業では、山手中華学校独自で発行している教科書『音楽』(音楽)と、日本の学校で用いられているもの(例えば小学生の授業では、教育芸術社発行の『小学生のおんがく』)が併用されている。独自の教科書は、音楽担当教員が作成したもので、教材の選定、編集、印刷まで全て自分たちで行っている。本稿では小学生の教科書に絞って検証する。

一年生から六年生まで、音楽の教科書の表紙には中国の少数民族が描かれており、一年生では蒙古族(写真1)、二年生は藏族、三年生は苗族という具合に、異なる民族の男女が民族衣装をまとった絵が掲載されている。

教科書の内容は、歌が中心となっており、例えば小学一年生の教科書では、21項目の内、16項目は歌曲であり(表1)、「上学歌」(登校の歌)や「老师,您早」(先生,おはようございます)のように、新しい学校生活を歌で学ぶようなものや、「红眼睛 绿眼睛」(赤信号 青信号)、「洗手绢」(ハンカチを洗う)のように日常生活に関する歌、そして動物や自然に親しむ歌などが中心となっている。歌以外では、音の強弱(*f, p*)など西洋音楽の記号やその意味を学ぶ項目もみられる。一年生では、「国旗国旗真美丽」(美しい国旗)と中華人民共和国国歌以外は、直接中国を象徴するような歌や項目はみられない。しかし二年生になると、中国の「民歌」(民謡)が取り上げられ、中国の地図と共に、その歌がどの地域のどの民族のものかということが合わせて提示される。例えば、二年生の教科書では湖北省の民謡である「牧童谣」(牧童の歌)と共に、「湖北は地図上でどこでしょう?」という質問が、三年生では彝族の民謡である「我们大家都快乐」(私たちはみな愉快)と共に、「彝族は主に雲南,四川,貴州,広西省などに居住しており,四川凉山彝族自治州は彝族最大の居住地区です」という説明が添えられている。

民謡以外にも、中国の河川(長江,黄河)が歌詞に表れる「大中国」(大きな中国)や、「小朋友爱祖国」(みなさん祖国を愛しましょう)など、後者は特に「祖国」イコール「中国」とは歌詞に直接的に歌われてはいないが、中国の情景や結びつきを想起させる歌が取り上げられている。また、20世紀の著名な作曲家であり、後に中華人民共和国国歌に制定される曲を作曲した聂耳(Nie Er [1912-1935])の「卖报歌」(新聞売りの歌)なども、三年生から取り上げられ、作曲家の略歴と共に掲載されている。(四年生では、「黄河大合唱」で有名な冼星海(Xian Xing-Hai [1905-1945])も紹介される。)

四年生以降の高学年になると、五線譜の読み書きに関するより詳しい説明が増えると同時に、中国の民族楽器と西洋楽器紹介の項目も充実してくる。京劇や民族楽器(古箏など)の古典曲の紹介や鑑賞の項目も増え、中国の伝統芸能や芸術の理解を促している。また、低学年の教科書にも見られた「祖国」を取り上げた歌も引き続き盛り込まれている。例えば「祖国印象」(祖国の印象)、「歌唱祖国」(祖国を歌う)、「爱我中华」(私の



写真1 横浜山手中華学校独自の音楽の教科書

表1 小学一年生の音楽の教科書内容(横浜山手中華学校)

	目次(原題)	日本語訳(筆者による)
1	「你唱歌」	「歌いましょう」
2	「做早操」	「朝の体操」
3	「红眼睛 绿眼睛」	「赤信号青信号」
4	音的强弱	音の強弱を学ぶ
5	走走跳跳(音乐游戏)	走って跳んで(音楽遊戯)
6	「小雨沙沙」	「サラサラ小雨」
7	bpmf	ボボモフォ(中国語発音練習)
8	「国旗国旗真美丽」	「美しい国旗」
9	「中华人民共和国国歌」	「中華人民共和国国歌」
10	「上学歌」	「登校の歌」
11	音的高低	音の高低を学ぶ
12	「四季的歌」	「四季の歌」
13	「两只小象」	「二頭の象」
14	「小松树」	「小さな松の木」
15	「洗手绢」	「ハンカチを洗う」
16	「老师,您早」	「先生,おはようございます」
17	「像个小学生」	「小学生のように」
18	「劳动最光荣」	「働くことは,なにより素晴らしい」
19	「找春天」	「春を探して」
20	「横浜山手中華学校校歌」	「横浜山手中華学校校歌」
21	小歌星	小さなスター歌手(好きな歌・両親から聞いた歌など)

中華〔中国〕を愛する)、「我的中国心」(私の中国の心)などであり、万里の長城や天安門広場などの写真が添えられており、中国の情景と共に歌の世界を学ぶような内容になっている。更に、これらの祖国中国を歌った歌曲に加えて、一年生から六年生まで全ての教科書に、中華人民共和国の国家と、山手中華学校の校歌が掲載されている。

3.2. 横浜中華学院

台湾系の横浜中華学院では、馮彦國校長先生からの聞き取りによると、台湾から教科書を取り寄せて使用しているとのことだ。馮先生は、卒業生は台湾に帰る者も多く、同校の教育は台湾とつながっていないといけないとも話している。^v

音楽に関しては、小学一年生から二年生は、『生活』(南一書局)という教科書を用いているが、これは音楽のみを扱ったものではなく、日常生活に関する様々な事象を、音楽や運動(体の動き)、または簡単な工作などによって理解させるという総合的な教科書になっている。例えば、一年生の教科書の最初は、「認識班級和同學」(クラスと同級生を覚えましょう)という項目で、その中に、「節奏練習 動手拍拍看」(リズム練習 手をたたいてみよう)という欄があり、手をたたきながら自分の名前や同級生の名前をリズムに合わせて言ってみるという内容になっている。また、三年生から六年生は、『藝術与人文』(芸術と人文)と教科書名が変わるが、内容は同じく、音楽・体育・美術(工作)が一冊にまとめられたものとなっている。後述の音楽担当教員からの聞き取りによると、同校は台湾政府より無償で教科書を提供されているとのことである。しかし音楽・体育・芸術(『生活』『藝術与人文』)に関しては、約四年前から有償になったそうだ。有償になった際に、音楽は日本の教科書に切り替えるかどうかとの議論がされたが、やはり台湾のものを使うべきであるという結論になり、現在に至っているとのことである。ちなみに、東京中華学校(同じく台湾系)では、音楽に関しては日本の教科書のみを用いているそうである。^{vi} 横浜中華学院では、台湾の音楽教材に強いこだわりがあるようだ。また、横浜中華学院では、山手中華学校と同様に日本の教科書(『小学生のおんがく』[教育芸術社])



写真2 横浜中華学院で使用されている台湾の教科書(南一書局)

表2 小学一年生の音楽の教科書内容(横浜中華学院)

	目次(原題)	日本語訳(筆者による)
1	節奏練習 「動手拍拍看」	拍子練習 「手をたたいてみよう」
2	律動歌曲 「教室好幫手」	リズム歌曲 「教室のいいお手伝いさん」
3	聽唱歌曲 「我願做個好小孩」	聴いて歌う 「よい子になりたい」
4	律動歌曲 「猜拳」	リズム歌曲 「拳を打つ遊び(じゃんけん)」
5	節奏練習 「游戲安全」	拍子練習 「安全に遊ぶ」
6	聽唱練習 「請你幫助我」	聴いて歌う練習 「助けてください」
7	聽唱歌曲 「布穀」	聴いて歌う 「カッコウ」(ドイツ民謡)
8	律動練習 「風的 聲音」	リズム練習 「風の音」
9	欣賞歌曲 「四季一冬」	鑑賞歌曲 「四季一冬」
10	節奏練習 「冬天」	拍子練習 「冬」
11	聽唱歌曲 「恭喜恭喜」	聴いて歌う 「おめでとう」
12	補充歌曲 「國歌」	補足の歌 「(中華民国)国歌」
13	補充歌曲 「國旗歌」	補足の歌 「(中華民国)国旗の歌」
14	補充歌曲 「平安回家歌」	補足の歌 「安全に家に帰る歌」(ディズニー歌曲 'It's a small world')
15	補充歌曲 「放學歌」	補足の歌 「放課後の歌」(中国童謡)
16	補充歌曲 「我們的學校」	補足の歌 「私たちの学校」
17	補充歌曲 「老松樹」	補足の歌 「老松の木」
18	補充歌曲 「小蜜蜂」	補足の歌 「小さな蜜蜂」(ドイツ童謡)
19	補充歌曲 「風婆婆」	補足の歌 「風婆さん」(湖南省童謡)
20	補充歌曲 「落葉」	補足の歌 「落ち葉」
21	補充歌曲 「聖誕鈴聲」	補足の歌 「ジングルベル」
22	補充歌曲 「祝你耶誕快樂」	補足の歌 「おめでとうクリスマス」('We wish you a Merry Christmas')
23	補充歌曲 「新年新衫」	補足の歌 「新年の新しい服」(台湾語の歌)
24	補充歌曲 「新年歌」	補足の歌 「新年の歌」

も教材として用いているが、教員が必要と考える部分を抜粋し、コピーして配布しているとのことである（詳しくは後述する）。

台湾の教科書の内容を検証するために、一年生の『生活』のうち、音楽に関する項目を抜粋してみたところ（表2）、山手中華学校の教科書と同様に、学校での生活や動物などをテーマとした歌が多くみられた。また、台湾の国歌と国旗の歌が掲載されている点も、中国国歌が掲載されている山手中華学校と同様である。（但し、台湾の教科書は一年生の教科書のみ国歌と国旗の歌が掲載されている。）違いは、台湾の教科書には、「カッコウ」や「キラキラ星」などの童謡、そして、ディズニーの歌曲やクリスマス歌曲など、欧米の歌に、中国語の歌詞を当てはめたものが多く盛り込まれている点である。これは山手中華学校の教科書との大きな違いと言える。二年生以降の教科書についても同様に、台湾のものは、欧米の童謡や民謡が必ず数曲ずつ取り上げられている。三年生の『藝術与人文』からはリコーダーの練習が始まり、同時に、五線譜の記号や音符の詳しい説明も加わる。

国歌や国旗の歌以外に、中国もしくは台湾に関連した歌は、巻末の「補充歌曲」（補足の歌）に数曲掲載されている。例えば、一年生では湖南地方の童謡「風婆婆」（風の婆さん）と、台湾語で歌われる「新年新衫」（新年の新しい服）が挙げられる。二年生では、客家の童謡「滿姑轉外家」（叔母さんの帰郷）、台湾語の歌詞がついた「農村曲」（農村の曲）、そして台湾の童謡「捕魚歌」（魚とりの歌）が掲載されている。山手中華学校の教科書との違いは、台湾の教科書では歌の楽譜が掲載されているだけで、中国地図でその地域が示されたり、民族や地域の補足説明がされたりしていないということである。あくまで歌の紹介がメインということだ。

高学年（四年生～六年生）になると、京劇や台湾の歌仔劇（かざいげき）などの伝統芸能や、民族楽器の紹介も始まる。更に、台湾の作曲家である郭芝苑（Kuo Chih-Yuen [1921-2013]）や蕭泰然（Hsiao Tyzen [1938-]）が紹介され、彼らの代表曲が鑑賞曲として取り上げられる。このように中国、台湾の伝統芸能や作曲家が紹介されているのは大陸系の山手中華学校で製作された教科書と同様であるが、その分量としては、むしろ西洋音楽（バイオリンやトランペットなどの楽器紹介、オーケストラやオペラについての解説）の内容のほうが充実しているといえる。欧米の童謡や民謡が取り上げられている点なども含め、台湾の教科書は、より日本の教科書に近いといえるだろう。

4. 授業の様子

4.1. 横浜山手中華学校

音楽のカリキュラムは、小学一年生から四年生は週に2コマ（1コマは45分）で、五年生と六年生は1コマとなる。中学生は一年生から三年生まで週に1コマである。今回は小学三年生の授業を見学させてもらい（写真3）、学校独自の中国語の教科書『音乐』と、日本の教科書『小学生のおんがく』が、それぞれどのような配分で使用されているか、また先生は、どのようなことに重点をおいて指導しているかなどを中心に観察を行った。^{vii}

音楽の教室に入ると、グランドピアノの他に、19世紀の横浜華僑（周氏）の製作によるアップライトピアノが置かれている。壁には中国の作曲家（前述の冼星海と冼星海）の肖像画と共に、ベートーベンやシューベルトなど、西洋の作曲家の肖像画も掲げられている。また、中国の民族楽器の絵や、ト音記号や音符の絵も貼ってあり、中国語と日本語の両方で読み方が書かれている。見学した日の授業は、大きく分けて以下の三点の内容であった。1）中国語の教科書より「小青蛙你唱吧」（カエルさん歌いなさい）、2）日本の教科書より「茶つみ」（文部省唱歌）、3）日本の教科書より五線譜の読み書きとリコーダー。

まず中国語の歌を歌う前に、その歌詞の読み方と意味を入念に理解させることから始まった。先生は児童同士で読み方の確認をさせ、その後、何人かの児童に単語の意味を皆の前で言わ



写真3 横浜山手中華学校の音楽の授業
(撮影：有澤)

せ、中国語の発音が正しくない場合は何度も言い直させた。また黒板に単語と中国語の発音(拼音[ピンイン])を書いて、児童たちの理解に間違いがないことを確認した。児童たちは時折日本語を挟んで会話しており、中国語より日本語のほうが流暢な児童が多いようであった。授業後に聞いた話によると、低学年は日本生まれの児童が多いということであり、自宅では日本語を話している場合がほとんどのようだ。中国語の歌を教えることで、音楽を覚えるだけでなく中国語を上達させることも目的としているように思われた。

その後、先生は教授言語を中国語から日本語に切り替えて、日本の教科書の「茶つみ」のページを開かせた。文部省唱歌である「茶つみ」は「ころのうた」という項目に掲載されており、茶畑の写真と、日本の主なお茶の産地が地図上に示されている。「茶つみ」の練習では、歌詞の発音や意味の確認はなかった。前回の授業で既に歌詞の説明が行われていたのかもしれないが、児童たちは中国語の歌よりもスムーズに歌えていたようであった。ピアノ伴奏で一度歌った後、先生は「この歌を歌う時は、どんな気持ちで歌ったらいいですか?」と問いかけた。「お茶をつむのは大変という気持ち」や「ありがたうの気持ち」という意見が児童たちから挙がり、先生はそれらに同意して、「お茶を摘んでくれる人がいないと私たちはお茶を飲むことができないので、感謝の気持ちを持って歌いましょう」と語りかけていた。

「茶つみ」の後も引き続き日本の教科書を用いて、リコーダーの練習に入った。まずは五線譜の音符の下に読み方を「ドレミ」で書かせ、先生は黒板に音符を書いて確認を行った。最後にリコーダーを皆で吹いて、その日の授業は終わった。中国語の歌、日本語の歌、五線譜の読み書き、リコーダーと、盛りだくさんの内容であったという間の45分であった。

4.2. 横浜中華学院

台湾系の中華学院でも、音楽のカリキュラムは大陸系の山手中華学校と同じで、小学一年生から四年生は週に2コマ、五年生と六年生は1コマである。違いは中学生のカリキュラムで、中華学院の場合は、一年生と二年生は週に1コマの授業があるが、三年生になると音楽の授業はなくなる。音楽担当教員の話では、中学三年生で音楽の授業がなくなるのは、高校受験のために他の科目の勉強で忙しくなるからとのことである。ⁱⁱⁱ 中華学院の音楽室には、山手中華学校の教室に掲げられていたような作曲家の肖像や民族楽器の絵等は見られなかった。今回は小学生の授業は見学がかなわず、中学一年生の授業を見学させてもらった(写真4)^{ix}。この日は1時間すべてリコーダーの練習にあてられた。まずは先生が五線譜の音符の読み方やリズムの取り方について説明を行い、その後実際にリコーダーを吹く練習に入った。この日は、台湾の教科書『藝術与人文』と、プリントアウトした紙がつかわれていた。先生は基本的に中国語で授業を行ったが、生徒が日本語で質問したりすることも多く、先生も時折日本語を交えて話していた。山手中華学校のように、中国語を教授言語とする時間帯と日本語を教授言語とする時間帯を明確に分けることはせず、基本的には中国語を用いて授業が行われているようであった。

今回の授業では、五線譜の理解とリコーダー練習のみであり、中国語が教授言語である以外は、日本の学校と同様の音楽の授業であるといえる。後述の音楽担当教員からの聞き取りでは、中学生になると声が出なくなるので、リコーダーが中心の授業となるが、学校の行事(卒業式や記念式典など)で歌うために、歌の練習も授業で行うことがあるとのことであった。^x 中学生の授業内容からだけでは、「民族教育」という観点からの考察は難しい。大陸系の山手中華学校で見学した授業との比較を行うためには、中華学院でも小学生の授業を見学し、どのような歌の練習をしているのか、教員はどのようなことを重点的に指導しているのかを観察する必要があるが、今回は後述の音楽担当教員からの聞き取りによって考察を行うこととする。



写真3 横浜中華学院の音楽の授業
(撮影:有澤)

5. 音楽担当教員からの聞き取り

5.1. 横浜山手中華学校

音楽の羅順英先生にお話を聞いた。^{xi} 羅先生は同校の卒業生で、中学卒業後は地元の高校に進学し、その後、武蔵野音楽大学で声楽を専攻した。羅先生自身は華僑四世とのことである。

まず山手中華学校独自の音楽の教科書について、なぜ、中国で使われている教科書をそのまま使わないのかと質問した。その理由は、中国の教科書は欧米よりで、「私たちがほしいものがあまりない」からとのことである。「ほしいもの」というのは具体的にはどのような教材かということ、70年代から80年代頃の歌などで、例えば「我的中国心」(私の中国の心)などである。これは香港の作詞家と上海の作曲家によって作られた曲で、1984年に中国中央電視台の春節番組で張明敏によって歌われて流行した曲である。歌詞には長江、黄河、万里の長城、黄山などが盛り込まれ、「祖国中国」への熱い思いが歌われている。このような曲は、羅先生いわく、華僑の間ではよく歌われる歌だが、おそらく中国の教科書には載っていないとのことだ。「外国に暮らす中国人として知っておきたい曲というのは、むこうの人たちには古臭い」が、自分たちとしては、外国に住む華僑に伝えたい曲がたくさんあり、今の子どもたちにも「おじいちゃん、おばあちゃんが知っている曲」を覚えてほしいと考えている。確かに、前述の通り、山手中華学校の教科書には、「祖国」を歌った歌が多く取り上げられており、1950年代から80年代(中には90年代作曲のものもあるが)にかけて流行した歌曲を取り入れているようである。

また、前述の教科書内容でも触れた民歌(民謡)について聞くと、中国地理の授業とリンクさせて各地の民歌のことを教えるとのことであった。例えば「茉莉花」は中国の様々な地方で歌われるので、歌のバリエーションを教えると同時に地域の文化についても説明を行っている。また、少数民族のことも、できるだけ民歌を通して取り上げるようにしている。「ここ(学校)から一歩出れば日本」なので、中国のことは、「この(学校)中でしか教えることはできない」と先生は話していた。

独自の教科書作成に関しては、以前はインターネットもなく、必要な歌は華僑の間で歌われているのを聞き書きして五線譜に書きおこしたり、中国に行つて曲を揃えたり、少数民族のことは想像で話をしたりと、試行錯誤で行っていたそうである。パソコンのない時代は、手書きの教材も使っていたということだが、近年になってやっと、インターネットでも情報が得やすくなったし、カラーで体裁の整った教科書を子どもたちに提供できるようにもなってきたとのことだ。

日本の教科書を使うことについては、「日本の子どもたちが教わるものも、うちの子どもたちに知ってほしいから」というのが理由である。時間の関係で全てを網羅することはできないが、大事な部分を抜き出してやっており、例えば前述の「茶つみ」の歌のように「こころのうた」の項目に取り上げられているような曲をなるべく選んで教えるようにしているそうである。また、中学生の日本の教科書にはベートーベンの鑑賞曲なども載っているので、そういったものも教えるようにしている。学校の教育方針の中に、「公立中学と同等レベルの教育をする」という項目があるので、その方針に沿って、音楽に関しても、高校進学後も他の日本の生徒と同レベルで授業が受けられるような教育内容にしているとのことであった。

更に、中国語の教材を用いる時も日本語の教材を用いる時も、両国のつながりを伝えるようにしているということだ。例えば「茶つみ」を教える時は、見学した授業では「感謝の気持ち」について言及していたが、そのほかにも、中国から日本にお茶が伝わってきたことや、中国にも茶つみの歌があるということなどに触れて、両国の関連性を伝えるようにしている。羅先生は、山手中華学校の教育方針は「中国語と日本語のバイリンガル教育」であるが、それは言語だけでなく「文化や常識」を含めたバイリンガルの子どもたちを育てることだと述べている。多くの児童・生徒は日本で生まれ育って、このまま日本でずっと生活をしていくので、日本の社会に進んでいくための、どちらにも偏らないベースの教育をしている。授業の中で「中国に対する思い」などはもちろん育てていくが、それは最近、中国や北朝鮮などに対して批判的に語られることの多い「愛国教育」とは異なり、色々な角度からグローバルに物事を考えられる生徒を育てるのが目的であると語った。その点では、同校の良さを知っている卒業生が教員として戻ってきてくれるのが一番良いと、羅先生は考えている。「教科」を教えるという点では、中国大陸から来る先生のほうが適しているのかもしれないが、「教育」という点では卒業生のほうが良いということだ。中国語や中国の地理・歴史・文化などについては、中国から招聘した

教員のほうが、より充実した知識を教えることができるかもしれないが、偏らない人材を育成するという同校の教育方針は、日本に根を下ろした老華僑の卒業生のほうが、自らの実体験として理解しているということだろうか。

では、近年増加している新華僑や日本人児童・生徒の存在について、音楽の授業で問題になることはないかどうかという質問に対しては、特に高学年では新華僑の子どもが多く、彼らは授業にきちんと取り組んでくれない場合があると指摘している。なぜなら、現在の中国では音楽という教科が重視されておらず、「なんでこんなことやらないといけないの?」という態度をとったりするそうだ。特に都市の学校や進学校から来た子どもたちなどは、授業として音楽を学んだ経験がない場合が多く、リコーダーに触ったことがなかったり、五線譜が読めなかったりするのだから、彼らのフォローは大変だということだ。また、中国の昔の歌を取り上げたりすると、「なんでこんなお父さんお母さんが歌っている曲をやらなきゃいけないの?」などという反応があったりするらしい。しかし、そういう子どもたちも、授業を通して音楽の面白さを知って次第についてきてくれるようになるという。

日本人児童・生徒の存在については、特に大きな「問題」としては取り上げられなかった。中華学校に子どもを通わせる日本人の親は、仕事の中で中国とのかかわりがある場合が多く、子どもが家に帰って来て授業で習った中国の歌を歌ったりすると親は喜ぶそうだ。だが同時に、日本の曲も知っている「安心する」らしい。この安心感は、自分の子どもが中国一辺倒になってしまったら困るという、親の心配からくるものだろうか。

5.2. 横浜中華学院

音楽担当教員は江素珍先生と饒思瑩先生である。授業は饒思瑩先生による中学一年生のクラスを見学させてもらったが、聞き取りは、同校で二十年以上の勤務経歴がある江先生から行った。ⁱⁱⁱ 江先生は台湾生まれで、高校卒業後に日本に渡った。大学では、武蔵野音楽大学の学部と大学院で声楽を専攻した。

前述の通り、中華学院では台湾の教科書が用いられている。特に低学年の授業では、中国語をしっかりと身につけさせたいので、中国語の歌を教える時には、歌詞に出てくる言葉を、身振り手振りを交えて表現しながら歌わせるようにもしているらしい。音楽を通して中国語を上達させるという目的は、山手中華学校と同様といえる。また、台湾の教科書には、台湾語の歌も数曲掲載されており、授業で数曲取り入れているとのことである。しかし生徒には台湾語ができない者もあり、台湾語の歌を教えるのが一番むずかしく、やはり中心は中国語（マンダリン）の歌曲になるとのことだ。

中華学院では、基本的には台湾の教科書を使用しているが、日本の音楽の教科書からも、特に歌を抜粋して教えているとのことであった。どのような歌を教えるかという点で、「こいのぼり」「ひらいたひらいた」「うみ」「うれしいひなまつり」「虫のこえ」等、日本人ならだれでも知っているような童謡を抜粋しているとのことだ。日本語の歌を取り入れるようになった理由は定かではないが、おそらく保護者からの要望があったからではないかということである。学校としては台湾とのつながりを重視しつつも、将来日本の高校や大学に進学する子どもたちに、日本人が知っている歌も知っておいてほしいと考える親たちがいることは、納得できる。しかし、あくまで授業は中国語で行っているとのことだ。「せっかくここで勉強しているんだから北京語（マンダリン）をやらないと駄目」と先生は話していた。中国語の歌も日本語の歌も教えている点では、山手中華学校と同様だが、中華学院では、教授言語はあくまで中国語を基本とするという点は、バイリンガル教育を明確にかかげ、中国と日本の音楽教材を同等程度教えている山手中華学校とは異なる教育方針であるといえる。

日本人や新華僑の子どもが増えていることで、音楽の授業で問題は生じていないかとの質問に対しては、特に大きな問題はないが、転校生は中国語ができなくて困るとの回答であった。また、着任してからの二十年間で音楽の授業に変化があったかどうかについては、当初は華僑教育に慣れていなかったこともあり、戸惑ったこともあったが、基本的には台湾の教科書に沿って教えているので、昔と今とで大きな変化はないそうである。変化といえば、当時は一クラスに生徒が十人程度であったが、今は約三十人になって、大所帯になってきたということらしい。山手中華学校、中華学院共に、新華僑や日本人の入学希望者が年々増大しているようである。

6. おわりに

横浜山手中華学校(大陸系)と横浜中華学院(台湾系)の音楽教育について、授業を中心に考察を行ったが、まずは使用している教科書に大きな違いがみられた。山手中華学校では、中国の外に住む「華僑」のために必要な教材が多く取り上げられており、「祖国」を愛する心を歌った歌曲や、中国の地理や文化などもリンクさせた民歌(民謡)の紹介などがその特徴である。山手中華学校のほうが、明確に、「日本社会に進んでいく華僑のため」という教育方針が、音楽の授業にも表れているといえる。この方針に沿って、まずは中国の歌曲によって、「自分の祖国とは何か」、「自分は何者なのか」というアイデンティティを育成し、同時に、日本の童謡や唱歌を学ばせることで、将来も日本社会で生きていくために、日本人とも、幼いころに歌った歌を共有し、共感できる心を育成しようとしているのではないだろうか。音楽の授業に関しては、中国政府からの指導はもとより協力も特に得ていないようであり、この点では、学校独自の音楽教育が行われているといえる。

一方、横浜中華学院では、台湾で使用されている教科書をそのまま使っているため、「華僑」のための音楽教育という観点は強くみられなかった。日本の教科書から補足として日本の童謡などを教えているが、あくまで学校として正式に使用しているのは台湾の教科書で、日本の教材は補助的教材として扱われている。また、教員も、中華学院では台湾から教員を積極的に採用しており、音楽の教員も台湾生まれであることから、教授言語も必然的に中国語(マンダリン)が基本となり、教材も台湾のものを中心となってくるのではなかろうか。同校の教育方針が、「華僑」というアイデンティティの育成よりも、台湾に住む人々と同等の教育を提供することによって、台湾社会の理解や文化の共有を促進していくという前提に立っているように思われた。

今回は音楽の「授業」を検証したが、その中では、二胡や古箏などの中国民族楽器は取り上げられていなかった。授業では、あくまで教科書に沿って、歌とリコーダー(低学年では鍵盤ハーモニカも)を中心に指導しており、限られた授業時間の中で、定められたカリキュラムを消化していかねばならず、民族楽器までは手が回らないようである。しかし、クラブ活動や課外活動では、専門家を招いて民族楽器の指導をしてもらっており、前述の獅子舞や龍舞、民族舞踊などを通して、授業外では、様々な形で音楽・芸能教育が行われている。これらの課外活動もまた、学校にとっての重要な民族教育であり、音楽教育の一環としてとらえ検証していかなくてはならない。また、本稿では、教員側の視点を中心に考察を行ったが、児童・生徒や保護者の立場からは、学校側の教育方針はどのように受け止められているのだろうか。例えば、「祖国」中国を愛する心を歌った歌を、日本人の児童・生徒やその保護者はどのように感じているのかといった点など、一つ一つの教材について、今後より詳しく検証していく必要がある。

謝辞

この度の調査にご協力くださった、横浜山手中華学校の諸先生方、横浜中華学院の諸先生方、横浜中華会館の関廣佳氏に感謝申し上げます。

注

- ⁱ 張(2008)には、中華人民共和国成立後の、中華民国(台湾)政府による華僑教育政策は言及されていない。
- ⁱⁱ 横浜山手中華学校、羅順英先生からの情報提供による(2014年8月)。華人357名は大半が日本国籍であるが、その内、マレーシア国籍2名、オランダ国籍1名、アメリカ国籍3名を含んでいる。また、羅先生によると、日本国籍を取得した「華人」でも、中国から来たばかりで日本語を全く話せない子どもが近年増加しているということである。
- ⁱⁱⁱ 横浜中華学院の馮彦國校長先生からの聞き取りによる(2014年8月)。
- ^{iv} 横浜中華会館の関廣佳氏からの聞き取りによる(2014年6月10日)。
- ^v 横浜中華学院の馮彦國校長先生からの聞き取りによる(2014年5月17日)。
- ^{vi} 横浜中華学院の江素珍先生からの聞き取りによる(2014年6月10日)。
- ^{vii} 横浜山手中華学校の授業見学(2014年6月13日)。
- ^{viii} 横浜中華学院の江素珍先生からの聞き取りによる(2014年5月17日)。
- ^{ix} 横浜中華学院の授業見学(2014年5月17日)。

^x 横浜中華学院の江素珍先生からの聞き取りによる (2014年5月17日)。

^{xi} 2014年6月13日。

^{xii} 2014年6月10日。

参考文献

石川朝子 (2010) 「中華学校で伝達されるエスニック・アイデンティティのメッセージ—神戸中華同文学学校の『通訳』と教員インタビューから—」『華僑華人研究』7, pp. 105-122

王鑫 (2009) 「日本における華僑学校の変遷とその地域の特徴—神戸中華同文学学校と横浜山手中華学校を中心に—」『兵庫教育大学 連合学校教育学研究科紀要 教育実践学論集』10, pp. 125-133

上手裕子 (2009) 「中華学校で使用される中国語教科書と教科名に関する考察」『金城学院大学論集, 社会科学編』6 (1), pp. 75-88

杉村美紀 (2011 a) 「日本の中華学校における母語教育の今日的意義」『ことばと社会: 多言語社会研究 特集 学校教育における少数派言語』13, pp. 172-189

----- (2011 b) 「変容する中華学校と国際化時代の人材育成」『華僑華人研究 特集 華人とは誰か: 教育とアイデンティティ』8, pp. 75-77

張玉玲 (2008) 『華僑文化の創出とアイデンティティ— 中華学校・獅子舞・関帝廟・歴史博物館—』ユニテ

陳天璽 (2009) 「中華学校に通う日本の子どもたち」『文化人類学』74 (1), pp. 156-175

(A Research Note)
Music Education at Overseas Chinese Schools in Japan
—The Cases of Yokohama Yamate Chinese School and Yokohama
Overseas Chinese School—

Arisawa, Shino

International Student Exchange Center

Abstract

Overseas Chinese Schools in Japan are known for their ethnic education (*minzoku kyōiku*), in which Chinese language, history, and culture are taught in order to maintain and enhance children's ethnic identity. This paper examines the ways in which music lessons are conducted in relation to their education policies. As a pilot research, I conducted fieldwork at two schools in Yokohama. One is Yokohama Yamate Chinese School, which is associated with the People's Republic of China, and so is known as a 'pro-China' (*tairiku-kei*) school. The other is Yokohama Overseas Chinese School, which is known as a 'pro-Taiwan' (*taiwan-kei*) school. In the survey, I examined if there were any significant differences in their music textbooks, teaching materials, and methods. As a result, it was revealed that in Yokohama Yamate Chinese School, the original textbook that contains various Chinese music materials, including Chinese songs handed down from the 'old-comer Chinese' (*rōkakyō*) community, is used along with the textbook used in Japan's public schools. Lessons are also conducted in both Chinese and Japanese by a teacher who was born in Japan and graduated from the same school. On the other hand, in Yokohama Overseas Chinese School, the textbook provided by the Taiwanese government is mainly used, while some materials from the Japanese textbook are used in a supplementary manner. Classes are given in Chinese (Mandarin) by a teacher from Taiwan, who only uses Japanese when it is necessary to help students understand the materials. It can be argued that such differences are caused by the contrast in their education policies: the former aims to provide necessary knowledge and foster the sense of being a Chinese person living in Japanese society, while the latter is geared to promote understandings of Taiwan and encourage cultural sharing with the Taiwanese people through providing children with an education that is similar to the education that they would receive in Taiwan.